

さるの顔はなぜ赤い 大阪

あるばん、けものたちがにわか雨にあいました。古いこわれかけた家があつたので、そのひさしの下で雨宿りしました。

すると、家中から、そこの主人がひとりごとをいつていてるのが聞こえました。「ああ、雨もりが恐い。いくら、とらやおおかみがおそろしいといったって、雨もりとはくらべものにならん」

けものたちはびっくりしました。

「なんだって。おれたちは、とらやおおかみが何より強いって思つてたのに。もつと強い雨もりってやつがここにいるのか。にげなくつちや」

そのとき、けものたちの足音を、主人が聞きつけました。主人は、放してあつた馬が帰つてきたのかと思つて出てきました。けものたちは、

「雨もりだあ」とさけんで、先をあらそつてにげだしました。主人は、馬をつかまえようと追いかけてきました。

みんなの一番後ろをさるが走つていました。主人は、馬のしつぽだと思つてさるのしつぽをつかまえました。さるは、力の限りにげようとしたので、顔がまつかになりました。しまいに、しつぽがぶつんと切れてしましました。それでようよう、さるはにげきることができました。

そのときから、さるの顔はまつかで、しつぽはみじかいままなのだそうです。
おしまい。

原話：『奇談一笑』岡白駒・西田維則／赤志忠雅堂

再話：村上郁